
すごいホームレスの皆様

夢猫 P

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すごいホームレスの皆様

【Nコード】

N2015BA

【作者名】

夢猫P

【あらすじ】

ひよんななことで知り合った公園に住むぶつとんだホームレス達。彼らの特徴は笑顔と超能力。彼らはリストラを笑い飛ばし、役に立ちそうで役に立たない能力で日々をやりくりしていた。そんなホームレスと私のドタバタな日々が繰り広げられる。

これが私です（前書き）

深く考えず、ただ楽しいものがかけたらなあ、とその一心で書いて
みました。クスツとでも笑っていただけたら光栄です

これが私です

私は某雑誌社に勤める22歳のOL。

名前は音岸凜^{ねぎしりん}。

なかなか今の生活に満足している。上司に扱^こきつかわれたり、やたら優秀な同僚がいたりするが、それでも充実している。彼氏もないが、それでもいい。

あ、特技は聞いたことをすぐに記憶できること。

雑誌の取材がメモ要らずだったりできるのがちょっとした誇りだ。

それと、自分でいうのはなんだが、正義感が強い。

昔からヒーローなようなものに憧れていた。

そして、今日^{こんにち}、その正義感が崇^{たた}って、アイツらと会うこととなつてしまった。

きっかけは川で溺れる猫を助けようとして。

まったく情けない話、私は運動の方はからっきしなのだ。泳ぎなんてまったくできない。

それなのに……飛び込んで……

本当に情けない。

彼がホームレスのリーダーなようです

「ふえつくし！」

女性としてはしたないほどのくしゃみをしてしまった。

それも仕方ないだろう。

真冬に子猫を助けるために川に飛び込んだのだから。さらにかっこ悪いことに猫と一緒に下流まで流されて挙句の果て、私と一歳違いでしかないホームレスに助けられてしまった。

本当に情けない。

「ほい」

私を助けた張本人が湯気の立つカップを私に差し出す。

一見モデルみたいな好青年だが、バッチリ公園に住むホームレス。

「あ、ありがとう」

「いいよ、あんたが流れてきた川の水を温めただけのお湯だけだな」

青年の吐いた恐ろしい発言に思わず私は口に含んでいたお湯を嘔出す。

「げほっ、げほっ！」

「もったいない。なに？ ホットココアでも出ると思った？ 俺たちホームレス。そんなものが出てくるわけないだろ。助けてやった

だけ感謝しな」

コイツ、ムカツク。

この青年と出会って、数十分。悪い印象しかない。

川岸で猫を受け取るなり私を置いていくし、ホームレス狩り対策として設置してある罠にわざとはめるし、そして今のお湯といい…。

それに、このホームレスの集落的場所に集まる人には共通点がある。まず、常に笑ってる。それは人として前向きで良い事かも知れないが、大した理由もなく、上司の機嫌だけでリストラされたおっちゃんや、インテリ系の外見をもっても四八回も面接に落ちてるお兄さんなどなど。少しくらい落ち込んだほうがいいと思う。

そして、最大の特徴は、このホームレスは皆、役に立ちそうで立たない超能力者の集団であること。

例としてはその月の日数分の高さだけ物を宙に浮かばせることができる念力使い、五分に一回、世界中の誰かの思考を読み取るサイコメトリー。

そして、目の前のこの青年は材料さえあれば物を作り出す能力、中世の錬金術のようなものだ。ただし、その材料は『ゴミ』であることが条件だったり……。

「ほれほれ、人の親切心を無駄にすると風邪ひくぞ。……いいこと思いついた！」

親指をこめかみに押し当て、青年は笑う。この数十分を経て、この仕草があると私に災難が降りかかる事がわかっている。

「させるか!」

青年の悪巧みわるたくを阻止すべく（とは言っても何か案があるわけなく）青年に詰め寄るが時すでに遅し。

「木片とプラスチックに、」

コイツの超能力は質量保存しつりょうほぞんの法則だとか様々なものを無視したぶつとんだもの。たった一握りの木のくずにコンビ二弁当のふたを両手で合わせて頭で完成品をイメージするだけでそれを作り上げてしまふ。そして、今回作ったのは、

「せんぷうーき!」

若干発音がおかしかったがそんなこと気にしてはいられない。

電気ではなく手動の扇風機。確かに回すのであろうレバーが付いている。

「それじゃあ、風邪ひけ」

悪人のごとく歯を見せて笑うと、全力でレバーを回し出す。正直にゴミ扇風機の羽も回りだし、水浸しの私へ風を送り出す。

さらに、物理的な法則に乗っ取って短めのスカートもフワリを舞い上がる。

「ちょ、やめなさいよ!」
「そうだな、飽きた」

使用時間数秒でゴミ扇風機は青年の蹴りでバラバラになった。

風が止んで私はほっと胸を撫で下ろす。

「もう、デリカシーやマナーってものを知らないの?」
「いや、そんなことよりさ」

だああああ、イライラする!

「一攫千金できそうなすげえことないかな」

私が勤める雑誌社でもここまで馴れ馴れしく話し掛けてくる同僚はいない。ましてや初対面でここまで話し掛けてくるなど。

8

「よくそこまで酷い仕打ちをしないと友達みたいに話しかけてくるわね」

「まあまあ、俺は川流しにあつてる猫を助けてやったんだから」

「貴方の目に私がないのは何でかしら?」

「猫を助けたらお前が付いてきたんだよ」

「何!? 私はオマケ!?!」

「そういえばお前、名前は?」

「話を逸らすなあ!」

ハッ我に帰ったが、ここは公園。ホームレスのたまり場とは言え公園なので、子供達を迎えに来たお母様方がそれはとてもとてもドン引きした目を向けている。

「あ、やっちまったな。ちなみに俺は唯木カナタ。唯一の唯に木。カナタはカタカナだから」

「……なに、さらっと自己紹介してんのよ。はあ……音岸凜よ。もう出会わないことを祈ってるわ。ホームレスの唯木さん」

濡れた服のまま、嫌味を残して私はホームレス唯木のもとを去っていった。

彼がホームレスのリーダーなようです(後書き)

クスツツとしていただけたなら光栄です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2015ba/>

すごいホームレスの皆様

2012年1月5日01時50分発行